



第175号

発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主 な 内 容

- ② 新任あいさつ
- ③ 校友会・KMS・FUNDだより
- ④ “心ある”臨床医養成のための卒前医学教育(上)
- ⑤ 支部だより 大阪・岐阜・阪神
- ⑥ 第2回 芝蘭会代議員選挙総会・評議員会・理事会人事異動・会員訃報

免疫応答の解明で業績



る優れた業績に対して与えられる。
今回の受賞は「免疫応答の解明」に関する一連の抗体遺伝子の遺

伝子再構成モデルを發表した後、1980年、1982年にそのDNA構造の解明によりモデルを完全に証明し、その後、クラススイッチの制御に関わるサイトカインIL-4お

びIL-5の分子構造と機能の解明を行った。さらに、2000年にactivation-induced cytidine deaminase (AID)を発見し、これが抗体のクラススイッチと体細胞突然変異の両

者に必須の遺伝子であることを証明し、また、AIDはヒトにおける発癌の原因にもなりうるということが報告された。

この一連の研究は、獲得免疫における抗体記憶の形成、すなわち、ワクチンがなぜ効くかということの基本的な仕組みを明らかにしたもので、本庶客員教授は、現在もこの抗体多様化における遺伝子の変異導入のしくみとゲノム不安定化の関連についての研究を続けられている。

本庶客員教授にコッホ賞

11月、ベルリンで授賞式

医学研究科免疫ゲノム医学講座本庶客員教授(昭和41年医学部卒)がロベルト・コッホ賞を受賞することになった。授賞式は、平成24年11月にベルリンで行われる予定。

ロベルト・コッホ賞は、ロベルト・コッホが自身の結核に関する研究をサポートしてもらったことを目的に設立し、現在、ドイツ連邦共和国の学問の賞の中で最も高額かつ名声の高い賞であり、医学研究のなかでも主に微生物学・免疫学分野における

岡本道雄元芝蘭会会長逝去・98歳 医学研究科発展に尽力 心からご冥福を祈る

岡本道雄元芝蘭会会長が、平成24年7月24日、慢性心不全により98歳で逝去されたとの訃報に接し誠に残念であり、また、京都大学医学研究科・医学部にとっても大きな損失であり、芝蘭会会員を代表して心からご冥福をお祈り申し上げます。

岡本道雄先生は第21代医学部長として昭和44年8月14日から、昭和48年12月15日まで4年4月の間、学園紛争の最中、困難な医学部運営に携わってこられました。

学部長に在任の期間中は、大学紛争後の困難な時期にもかかわらず、46年3月には新外科系病棟への移転、47年4月に医学部附属臨床検査技師学校設置、47年5月の医学部附属動物実験施設設置、48年4月の医学部附属代謝研究施設設置など大きな事業を次々と進められて、医学研究科の発展に尽力され、昭和48年12月には、第19代京都大学総長に就任され、京都大学の発展にも尽力されました。

平成24年8月1日
芝蘭会会長 湊 長博

京大コミュニティー奮起を

S30年卒業の大保亮一

Passion 持つ教育肝腎



昭和30年卒業の大保亮一(Oyasu, Ryoichi)と申します。卒業2年後、フルブライト奨学金(渡航費)を取得、インターンとして米国に渡り、その後病理医の人生をアメリカで過ごし10年前に退職してシカゴに住んでおります。

今年初めの芝蘭会報に寄せられた湊会長の新年のご挨拶を興味深く読みましたが、その中に意味深長な表現がありまして、問題の箇所は、…む

るのでしょうか？ 私のアメリカ生活に基づく経験から一言感想を述べたく筆を執りました。

われわれの学生時代に確かに真剣に学問をする態度に欠けていました。つまらない講義、例えば病理のS教授とM教授の講義には出席者は20人以下。後者の教授は「詳しいことは僕の本に書いてあるから」とおっしゃる。今で言うならコマースナル。要するに教授陣は2-3人の例外をのぞき熱心ではありませんでした。学生からもつまらない講義を非難する声は皆無でしたし、抗議するということは大変失礼なことだと思っていたのです。

私がインターンを務めたシカゴの病院は「東のMt. Sinai (New York City)」、西のMichael Reese」といわれていたように最先端のユダヤ系教育病院でした。最初の2カ月間配属されたのは内科の8階西病棟(8 West)。インターンはその30人の入院患者を診る。東病棟(8 East)のインターンと2人で合計60人を担当。夕方5時以降は一人がオフ、もう一人のインターンが翌朝まで60人の患者の担当となる。新患がすくなくとも10人くらいは入る。診察し、カルテを書き上げ診断をつけ、内科のレジデントのオーケイをとる。寝る時間はほとんどなし。それはさすがに(grueling)苦闘の連続でした。1日おきの夜勤です。京大でのポリクリがなんの役にも立たなかったとすぐ感じました。私にとって傑出した発見は、相棒のイ

ンターン(たまたまハーヴァード大学出身)の医学知識の豊富さと自信を持った実践力。全く圧倒されました。例えば彼のつけた診断の一つを思い起こします。心不全の患者で「secondary aldosteronism」の診断。聞いたこともない表現。自分の医学知識がいかに貧困であるかをまざまざと自覚させられたのでした。思いあまつて5日目にインターンの係の先生の所へいって「日本に帰らせてください」と懇願したのに対し、スミス先生曰く、「3カ月頑張ってみてください。それでも辞めたいと思うなら考慮しましょう」。彼の激励の言葉は有り難かった。3カ月が終わったころにはいささか自信もつき、1年間のインターン生活を終えました。

つらかったのは英語の問題もさることながら、もっと重大なことは基礎的医学知識の貧困さということでした。

30年にわたる当地での教育に携わってひしひしと感じたことは、学生の学問吸収への意欲の凄まじさ。俺は高授業料を払っている(多くは30-40万ドルの銀行ローンをもっている。奨学金ではない)。それに見合った教育をしてほしい、という態度で毎日を生かしています。

「麻雀」などする暇なしです。

基礎医学が終る2年目の終わりに医師免許試験の第一部に合格しなければ3年目に進めません。臨床医学への暴露も1年目から始まっており、インターン開始時にはもう十分に準備ができていま

す。一方われわれの医学部時代は、受験勉強から解放され、4年間「遊ばう」という態度。これには学生のみならず教官連中にも大いに責任がありました。

当地の医学部の雰囲気をも具体的に述べます。例えば、私の病理の講義は朝8時開始でした。7時55分には私は教壇に立っています(生理学のS教授は少なくとも30分おくれて講義を開始するのを常とするのみならず科学ではない哲学的(?)あるいは新興宗教的(?)意見を示された)。講義室は約160人のsophomoresでいっぱい。出席していないのは2-3人か？ 壁の時計が8時を示したとたんに講義開始。1こまはたった50分ですから徹底してコンデンスした講義。あらかじめ渡しておいたsyllabusを読んできていますから聴いてるだけでメモはわずか。講義中に質問したがるので前もって言う「お。Since I have only 50 minutes, limit your questions to the very minimum; only those you consider essential to the whole class are accepted. I am very happy to answer your questions after the class. OK? Let's get started」(持ち時間は50分だ。従って質問は最低限にしてほしい。クラス全体にとって重要と思われるものに限って答える。講義の後で喜んで答えるから。では始めよう)。まあ、こう言っ

講義を開始するのです。

〔2面へ続く〕

新任あいさつ

平成24年4月1日付で、医学研究科細胞機能制御学(生理学第二講座)の教授を拝命いたしました。伝統ある生理学教室を主宰することになり身の引き締まる思いであります。

私は昭和60年に本学を卒業し、すぐに神戸市立中央市民病院で内科医として研修をいたしました。2年間の研修中の多くの患者さんとの触れあいを通して、疾患の原因に迫ることのできる研究に従事したいと感じ、井村裕夫先生が主宰されていた第二内科の大学院に入学しました。

第二内科では自己免疫疾患の研究、診療に従事し、その後も免疫の研究を継続する予定でしたが、種々の事情があり平成5年に米国のNIHへ留学を機に生化学的な研究テーマに着手しました。留学中に人類、疾患の理解に大きく貢献するbreakthroughは研究者

平成24年4月1日付で、医学研究科人間健康科学系専攻・理学療法学講座教授を拝命いたしましたので、芝蘭会会員の皆さまにごあいさつ申し上げます。

私は平成4年に本学医学部に入学しました。在学中より前所属である附属先天異常標本解析センターのヒト胚子標本群に興味を持ち、解剖学第一講座・塩田浩平教授(現副学長・理事)の下で研究を行っておりま

平成10年に医学部卒業後は本学婦人科学産科学教室(藤井信吾教授、現北野病院院長)に入局し、京大病院でNICU、麻酔科を含む2年間の研修を行い、平成12年に兵庫県立尼崎病院へ赴任しました。平成15年に大学院へ進学しましたが、婦人科学産科

の生命科学の根源に関する疑問から見いだされていることが多いことに気付き、基礎研究者としての道を歩むことを決意して帰学後は医学研究科、生命科学研究科で研究に従事しました。

平成13年に大阪市立大学医学研究科で生化学系の研究室を主宰する機会を得たことを契機に、生体内の生

オリジナルな視点持つ人材育成

細胞機能制御学 教授 岩井 一宏

化学的な素過程に着目し高次機能、疾患を俯瞰する研究を開始し、平成20年に大阪大学生命機能研究科/医学系研究科へ異動後も継続してまいりました。

この間、詳細は記載しませんが、流行を追いかけることなく素朴な疑問に對峙し、根源的な生化学的な素過程で未解明な問題に取り

学所属ながらも藤井教授のご高配により先天異常標本解析センターでのヒト胚の研究を再開することができるようになりました。

平成18年に学位取得後、NIHのCecilia W. Lo博士(現ビッツバーク大教授)の研究室へ胚のイメージジ

組みました。「流行らないサイエンス」であったお陰もあり、ゆつくりと腰を落ち着けて研究を進める時間に恵まれ、因らずも、がん、自己免疫、慢性炎症性疾患、神経変性疾患など今後人類が克服すべき疾患の治療法開発に繋がるようなオリジナルな研究成果が得られてきたことは、医師としてキ

て規定されます。臨床で使われている薬剤はいずれも分子を標的にしていることから理解いた

教育においては私の経歴を活かして、生体の機能を分子の動きで語ることを目指しつつ、学生さんたちに記憶するのではなく、「なぜ、どのようにして、この臓器はこのような機能を果

担当いたします生理学は、人の身体の機能を扱う学問領域で医学部教育の中核を担う分野です。それぞれの臓器、器官の機能も構成する細胞の機能によつて規定されます。細胞の機能も構成するタンパク質を中心とした分子の働きによつ

たすのか、果たさなければならぬのか」を考へてもらえるような講義を心掛けたいと思っています。

研究においても生理学の



診断ワークキンググループの委員に任命されましたので、日本の出生前医療を考へるという面でも活動していきたいと思っております。

現職着任に際しまして、まず急いで行うのは学部教育の充実です。早速この4

ご配慮をいただき、今後もセンターでのヒト胚子を用いた研究は続けさせていた

解剖学講義・実習の充実へ

人間健康科学系専攻教授 山田 重人



グ法の研究を目的に留学しました。短い期間でしたが、研究だけでなく、海外生活も十分に満喫することができました。

平成20年に帰国後は、先天異常標本解析センターのスタッフとして、ヒト発生学の研究および、解剖実習を含む解剖学教育に従事しました。医学部の先生方の

り京大病院に産科超音波外来を開設、担当させていただいております。平成22年4月には遺伝子診療部の一員に加えていただき、先生方のご指導のもと、周産期の遺伝カウンセリングにも

月より私の担当である解剖学講義および実習が始まりました。人間健康科学科における解剖学実習は理学・作業療

教室であることを意識し、細胞から個体へと研究対象をシフトさせるとともに、私の原点である疾患の原因に迫ることのできる研究に着手したいと思ひます。

京都大学医学部・医学研究科はユニークな視点から世界レベルのオリジナルな研究を成し遂げた人材を数多く輩出し、世界で高い評価を得てきました。

学問、研究の進歩の速度は非常に速くなり、じつくりと考える時間を持てなくなりつつありますが、さすがは京都大学出身と思われ

一人でも多く輩出できるように微力ではございますが、尽力してまいり所存でございます。

今後とも芝蘭会会員の先生方におかれましては何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

法学専攻の学生に対してのものを中心で、看護・検査専攻の学生においては時間数も少なく十分とは言えない状況と思えましたので、

まずは人間健康科学科の全ての学生がしっかりと全身の解剖学を身につけるということを目標に、2回

人数が多く大変な面もありますが、関西地域だけでなく日本の医療・医学研究を支える人材を輩出するべく、まずは学部の解剖学講義・実習から、そして修士・博士課程での研究を通して微力ながら全力を尽くしていきたくと思っております。

今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

解剖学実習は理学・作業療

「1面から続く」

学生時代、ポリクリで外来にでたとき、教官連中の態度は「ほんとの勉強は卒業後始まるのだ」というもの。いかに

しろ「といわんばかり。思い返すと、4年間の無駄は一生取り返せないでしょう。卒業後はどうしても専門領域知識習得に偏るのは当然ですから。

私は退官後3年間、関東のさる大学および、その関連病院でコンサルタントとして学生および病院スタッフの教育に従事しました。

そのとき如実に感じたことは、いわゆる専門医が基礎的医学知識に貧困であるということ。ある患者が呼吸器内科に来院した。無駄な治療(抗生物質使用。効果無し)を2年継続。最後に私の強い勧めでOpen lung biopsy。私がつけ

た診断は Wegener's granulomatosis。担当医がびつくりして飛んでくる。カルテを調べてみると、何と2年前から血中クレアチニン値が上昇していたのです。この先生は Wegener's granulomatosisを考慮

していたのかもしれないがこの病気が腎障害をとまなう可能性大ということ

とを知らなかったかあるいは「腎臓は俺の知ったことじゃない」と、出て

いるデータを一視無して

いたのか、のどちらかでしょう。学生時代から当然知っているべき基本知識に欠けるため2年間無意味な治療していた訳です。そこで私は、当時この疾患に対して使われていたサイトキサン

の使用を勧めたところこの肺専門医はそれを使用した

がらない。「患者さんにもしものことがあったら」というのが返事でした。

基礎研究分野希望の学生の減少を湊先生は心配しておられます。もともと

本だけでなくアメリカでも同じ。しかし少ないといつてもクラスの1-2%は病理を専攻します。それでも足りない。

学生が病理とは何をする分野かということ

理解してないというのが原因の一つと病理の専門雑誌に発表されていま

す。従って学生時代に極力学生にそれを知る機会を与えることが重要。若い病理医の友人である筑波大の野口教授は彼の努力で毎年2-3人の卒業生を病理に受け入れて

います。機会を見つけては、病理は何をする専門

分野かを学生に示しているのが成功につながっているのです。

私事ですが、こちらにインターンで来たとき、翌年は外科のレジ

デンシーに応募するつもりでいました、ではなぜ病理を専門としたか？

実は同じ病院の病理のチーフレジデントは東北大出身の横尾先生という方。あるとき彼の仕事場で顕微鏡をのぞいてみると言われて見たのが4-5歳の子供の虫垂炎。先生曰く、「リンパ組織内に巨細胞が見えるでしょ

う？ これは Warthin-Finkedey 細胞だ。ウイルス疾患、特に麻疹を思わせる」。彼は小児科医にすでに電話をして

ました。彼の予想通り、この入院患者は術後全身に発疹が出現。麻疹の診断となりました。すなわち横尾先生の説明は、

「発熱、腹痛で来診。腹痛の原因は麻疹ウイルス感染による虫垂リンパ組織の増殖による。おそろく来院時、コプリーク斑があつたはずだ。もし気がついていたら、虫垂切除がさけられていた

だろう」。この卓越した病理医の解釈に圧倒されました。「これぞ私の望む分野。私も彼の足跡を踏もう」と、病理学の

大保 亮一

Joseph Mayberry Professor of Pathology Emeritus Northwestern University Feinberg School of Medicine Chicago, IL, USA

す。会員間の交流を図るためにも余程の事情がない限り名簿掲載に協力頂きます。前記「会員名簿調査確認書」を、必ず芝蘭会事務局へご返送ください。是非とも必要であります。敬具

芝蘭会 新会員名簿刊行へ

会員登録確認調査に協力を

拝啓 会員の皆様には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本年は芝蘭会会員名簿の刊行の年にあたり、平成24年11月末の刊行に向けて編集作業を進めております。つきまし

レジデンシーを選んだのです。病理は全く私にピッタリでした。

もし日本にいたら、病理を選ぶことはなかったでしょう。A助教授の講義を除き当時の講義があまりにも内容空疎、病理の面白さを知る機会がなかったのです。学生にその良さを示すのは教官の責任。学生諸君も6年間の勉学がいかに卒業後の医師としての活動に大きく影響することかを充分に自覚していただきた

い。

京大は研究面でも日本のトップ。優秀な学生の多い京大で医学部出身者がもっとも基礎研究に回らなければならぬ。それは可能で

す。ええ充分可能です。

この入院患者は術後全身に発疹が出現。麻疹の診断となりました。すなわち横尾先生の説明は、

「発熱、腹痛で来診。腹痛の原因は麻疹ウイルス感染による虫垂リンパ組織の増殖による。おそろく来院時、コプリーク斑があつたはずだ。もし気がついていたら、虫垂切除がさけられていた

だろう」。この卓越した病理医の解釈に圧倒されました。「これぞ私の望む分野。私も彼の足跡を踏もう」と、病理学の

大保 亮一

Joseph Mayberry Professor of Pathology Emeritus Northwestern University Feinberg School of Medicine Chicago, IL, USA

す。会員間の交流を図るためにも余程の事情がない限り名簿掲載に協力頂きます。前記「会員名簿調査確認書」を、必ず芝蘭会事務局へご返送ください。是非とも必要であります。敬具

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金 (KMS・FUND) だより

事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学部学生会館内
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

後輩のために 格段のご支援を

KMS - FUND 委員、皮膚科学 教授

宮地 良樹



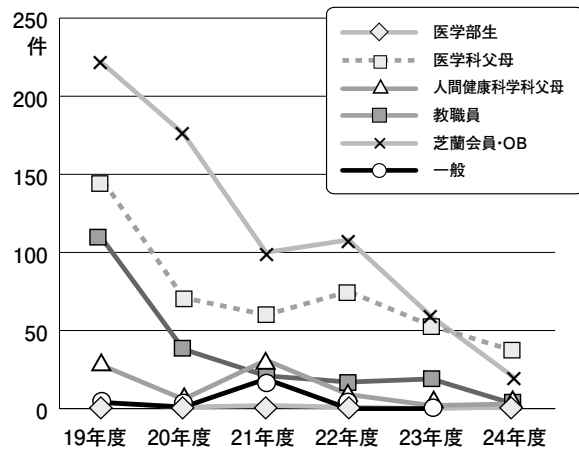
生時代を思い起こすと、学生会館などの厚生施設は皆無で、時代を考慮しても、キャンパスライフは貧弱であつたと言わざるを得ません。
今の医学生は多様な価値観を持ち、画一的な福利厚生ではその恩恵をあまり感じないかもしれませんが、学生会館でゆったり勉強したり、クラブ活動に没頭したりしている学生をみると、少し豊かになったわれわれがそのための空間や施設を提供してもいいのではないかと考えます。

京大は、歴史も長く、組織が大きすぎて、芝蘭会員も全国に散在しているため、かえって同窓意識が希薄になっているのではないかと思われま

しかし、自分たちの学

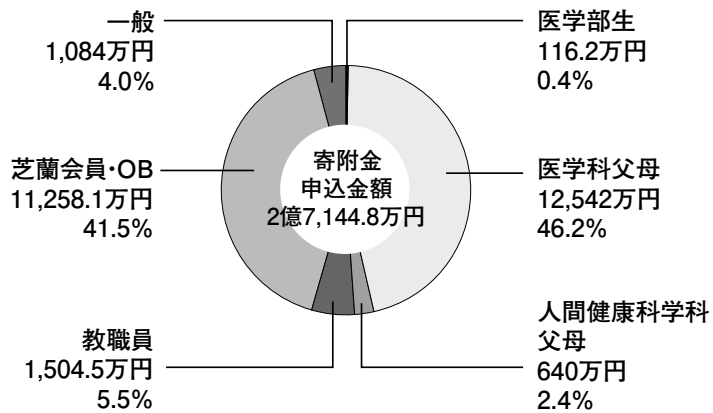
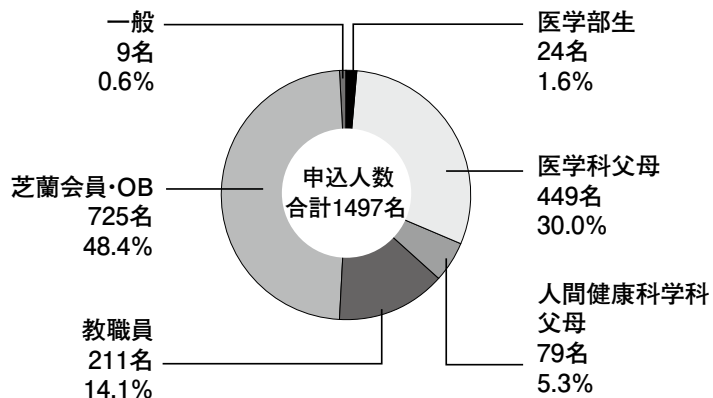
年度別申込件数の推移

平成24年7月30日現在



KMS-FUND 寄附申込

平成24年7月30日現在



Dでは学生会館以外にも京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)表彰による研究活動支援も行っており、その活動は次世代の医師・研究者の育成を見据えています。

ドタドタドタツと階段を落ちるように降りてきて、「あ、あつた。番号があるの!」と、泣き出さんばかりの娘の声で暗黒の10日間が終わりました。

大山というエベレストにも劣らぬ高みに登るためには、どうすればいいのか?

何しろ、一年間アメリカで、のんびりと過ごしてきた頭でしたので、

山頂でのご来光はまさに感動! 達成感たるや言葉で語ることはできないものでした。高みを目指す強いこころ、一歩一歩の積み重ね、決して諦めない根性を確認しまし

「京大山」への途

校友会会員 新屋 明美



われわれ大学人も年に一回分の講演料相当の寄附を心がけていますが、全体の5%程度に過ぎず、KMS・FUND寄附金の多くは医学生

雨の中、大学の掲示板で、「ほんまに受かってた!」と、合格の喜びを噛みしめたのが昨日のよう

まずは目覚ましに富士山を目指しました。しんどかったですが、

週末は、英語のヒアリングを口実に洋画へ誘って、一緒に気分転換とエ

た。受験勉強はお任せでしたので、家族としてできるだけ普通に支えていきたいと思いました。でも、できることは朝と夕、一緒にごはんを食べるぐらい。

京都大学医学部校友会 第5回 総会・講演会

総会 13:00~13:30 (京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール)

講演会 13:40~14:40 (各20分) (京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール)

「研究マインドをもった医師の養成」
生体情報科学 渡邊 大 教授

「最近の医学教育の動向(卒前と卒後)」
医学教育推進センター長 小西靖彦 教授

「腎臓病を治る病気にするために」
腎臓内科学 柳田素子 教授

特別講演会 15:00~16:30

「iPS細胞研究の進展」

京都大学教授
京都大学iPS細胞研究所 所長
ゲスト講演者 山中伸弥 教授

懇親パーティー (参加費 5,000円) 17:00~

(京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール)

主催 ■ 京都大学医学部校友会
共催 ■ 京都大学医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)
京都大学医学部
後援 ■ 一般社団法人 芝蘭会
会場 ■ 京都大学百周年時計台記念館
(百周年記念ホール・国際交流ホール)

参加申し込み・お問い合わせ先
京都大学医学部 校友会事務局
TEL:075-753-4322・075-761-2467
FAX:075-752-1528



”心ある“臨床医養成のための卒前医学教育試案

〈上〉

太田 富雄

(財)大阪脳神経外科病院
名誉院長
京都大学医学部
昭和31年卒

はじめに

私は現在81歳、昭和31年(1956)京大を卒業してから半世紀以上(56年)が過ぎた。大阪医科大学を退職してからでも、もう12年になる。定年後の定かな予定もなく数年が過ぎたところ、われわれ名誉教授は今後何をするかで、後進、社会に貢献できるのだろうか、と真剣に考えるようになった。

5年前、私の『脳神経外科学』(金芳堂)の改訂10版出版を機に、『日本脳神経外科塾 Academia Neurochirurgica Japonica』(ザ塾)を立ち上げた。そして専門領域での学問的貢献ではなく、後進のため、日本のため、人類のため、この歳になつて初めて気づくことを提案していくことにした。そこで、5年前の日本脳神経外科学会総会(岩手医科大学学長・小川彰会長)で、「日本脳神経外科塾設立記念講演会」を開催し、以来4年続いている(表参照)。そして今年の脳神経外科学会総会(大阪大学・吉峰俊樹教授会長)で第5回ザ塾講演会が開催される。当分の間、塾活動の三本柱の一つである「後進のため」、卒前医学教育の在

親身になり患者を治療 重要

81歳、後進のために考える

過去4回の講演会

日本脳神経外科塾設立記念講演会 (2008/10/01)

座長 高倉 公朋 東京女子医科大学先端生命科学研究所顧問
吉本 高志 大学入試センター長
太田 富雄 (財)大阪脳神経外科病院名誉院長
京都大学名誉教授 半田 肇 先生「脳の働き」
東京大学名誉教授 佐野 圭司 先生「今思うこと」
特別講演：大徳寺大仙院 尾関 宗園 師
「日本人の心性と禅」

第2回日本脳神経外科塾講演会 (2009/10/14)

テーマ：“心ある”医師養成のための卒前医学教育
—患者・医師間の関係改善方策を探る—
座長：兄玉南海雄 福島県立医科大学名誉教授
端 和夫 札幌医科大学名誉教授
太田 富雄 (財)大阪脳神経外科病院名誉院長
特別講演：“心ある”医師養成のための医学教育
iPSアカデミアジャパン社長 吉田 修
京都大学名誉教授(本学35年卒)

ディスカッサー：

伊東 洋 東京医科大学理事長
小林 茂昭 信州大学名誉教授
神野 哲夫 藤田学園大学名誉教授
桐野 高明 東京大学名誉教授

第3回日本脳神経外科塾講演会 (2010/10/14)

テーマ：東アジアにおける日本—良医とは？—
座長：兄玉南海雄 福島県立医科大学名誉教授
端 和夫 医療法人新さっぽろ脳神経外科病院名誉院長
太田 富雄 (財)大阪脳神経外科病院名誉院長

1. 韓国における良医について
Kil-Soo Choi Prof. Emeritus Soul National Univ. Korea
2. 台湾における良医について
Chun-Jen Shih Prof. Emeritus National Defense Med. Center, Taipei, Taiwan
3. 日本における良医について
高倉 公朋 東京女子医科大学先端生命科学研究所顧問
4. 総 評
山折 哲雄 国際日本文化研究センター名誉教授

第4回日本脳神経外科塾講演会 (2011/10/13)

テーマ：卒前医学教育 (II)
“心ある”医師養成を目指して
座長：吉本 高志 大学入試センター長
桐野 高明 国立国際医療研究センター長
橋本 信夫 国立循環器病研究センター長

1. 医療人教育に求められる卒前医学教育の役割
遠藤 俊郎 富山大学学長
2. 和歌山県立医科大学におけるケアマインド教育
板倉 徹 和歌山県立医科大学理事長
3. 変貌する医療から見た卒前医学教育のあり方
片山 容一 日本大学医学部長
4. バランスのとれた徳育・知育・技術教育
—医療の仕組みからの大改革の必要性—
小川 彰 岩手医科大学学長
5. 日本医師会の考える医学部教育と
臨床研修制度のあり方
中川 俊男 日本医師会副会長
6. 医学教育の現状について
村田 善則 文部科学省高等教育医学教育課長
7. 「卒近代」における医療人に求められる資質
鈴木 寛 参議院議員(前文科省副大臣)

「(下)は次の176号に掲載」

Freiheit フライハイトに思索を

り方について考えてゆくことにしている。表題の“心ある”臨床医養成のための卒前医学教育試案は、その一環として取り組んでいるもので、1994年(医学教育第25巻・第6号)以来、機会あるごとに提案してきたものである。

最初に、以下の文中に多用される“心ある”という用語について、解説しておく。三十余年を費やして大著『古事記伝』を完成させた国学者、本居

宣長は、伊勢の松阪で小児科を開業していた医師だが、彼が好んで用いた言葉である。それは、「概念的『本質』の世界は死の世界。みずみずしく生きて躍動する生命はない。生きるがままに捉えるには、自然で素朴な実存的感動を通じて『深く心に感』じるほかに道はない。そういうことのできる人を宣長は『心ある人』と呼ぶ。」(井筒俊彦『意識と本質』より)「患者」

界を驚かせ、最終的にはGDP世界第二位にまで持ってきた。この復興を成就させた日本人は、敗戦の憂き目をみたものの、昔の教育(儒教・武士道)を受けた為政者・官僚・国民であったことを見落としてはならない。今や、その彼らが日本の表舞台から退場した。そして戦後民主主義教育(儒教道徳、武士道精神の完全否定)を受けた為政者・官僚・国民が主体となつてい

言っても解決策は出てこない。そのような学生たちでも、“心ある”医師に育て上げるのがわれわれ教育者の義務である。早速、本論に入ろう。京都大学の学風は、何といてもFreiheit(フライハイト)、自由である。私が入学した1950年ごろは、まだ旧制第三高等学校関係の先生が在職しておられた。全学的にもさすが「弊衣破帽」のパンカラ姿は見られなかった。

最近の学生は、指示があればそつなくこなすが、自分たちから積極的に何かをすることは少ないといわれる。これでは自由な学風の京都大学に入学しても、友や先輩たちと熱く議論をすることもなく、大学では手とり足とりの学習指導が得られないとすれば、戸惑ってしまうのではなからうか。私が入学したころは、このドイツ語のFreiheitは

議論の中で頻繁に聞かれた。freedomより言葉を感じる。本文中でも多用する。いずれにせよ、先輩・同僚たちと酒でも飲んで議論する中で、自ら何かを始めてもらわないと、Freiheitの特徴が出てこない。大勢の先輩・医師にもまれて、自ら何をなすべきかを模索し、始めざるを得ない場が提供されなければなら

ら、後ろからこつそり抜け出し、外科学の受講はそれで終わった。しかし、内科学だけは、当時海賊版で出回っていた原書、『Cecil's Medicine』や『Harrison's Principles of Internal Medicine』を購入し、両者を完読し、サブノートも作った。ハリソンの方が読みやすく、理解しやすいことを覚えている。インターン時代も内科3科には真面目に出席し、Korthの『Klinische Elektrokardiographie』も完読した。また、同級生の深見安君を中心に、Fultonの『Physiology of the Nervous System』の輪読会にも参加した。結局私の学生・インターン時代は、英語・ドイツ語の医学書が読めるようになっただけで、各科の試験の時には、不安いっぱいであつたが、無事卒業できた。結局、臨床科の教授先生のお人柄に接することは全くなかったし、同級生たちとの深い交流もほとんどなかった。

言っても解決策は出てこない。そのような学生たちでも、“心ある”医師に育て上げるのがわれわれ教育者の義務である。早速、本論に入ろう。京都大学の学風は、何といてもFreiheit(フライハイト)、自由である。私が入学した1950年ごろは、まだ旧制第三高等学校関係の先生が在職しておられた。全学的にもさすが「弊衣破帽」のパンカラ姿は見られなかった。

最近の学生は、指示があればそつなくこなすが、自分たちから積極的に何かをすることは少ないといわれる。これでは自由な学風の京都大学に入学しても、友や先輩たちと熱く議論をすることもなく、大学では手とり足とりの学習指導が得られないとすれば、戸惑ってしまうのではなからうか。私が入学したころは、このドイツ語のFreiheitは

議論の中で頻繁に聞かれた。freedomより言葉を感じる。本文中でも多用する。いずれにせよ、先輩・同僚たちと酒でも飲んで議論する中で、自ら何かを始めてもらわないと、Freiheitの特徴が出てこない。大勢の先輩・医師にもまれて、自ら何をなすべきかを模索し、始めざるを得ない場が提供されなければなら

ら、後ろからこつそり抜け出し、外科学の受講はそれで終わった。しかし、内科学だけは、当時海賊版で出回っていた原書、『Cecil's Medicine』や『Harrison's Principles of Internal Medicine』を購入し、両者を完読し、サブノートも作った。ハリソンの方が読みやすく、理解しやすいことを覚えている。インターン時代も内科3科には真面目に出席し、Korthの『Klinische Elektrokardiographie』も完読した。また、同級生の深見安君を中心に、Fultonの『Physiology of the Nervous System』の輪読会にも参加した。結局私の学生・インターン時代は、英語・ドイツ語の医学書が読めるようになっただけで、各科の試験の時には、不安いっぱいであつたが、無事卒業できた。結局、臨床科の教授先生のお人柄に接することは全くなかったし、同級生たちとの深い交流もほとんどなかった。

言っても解決策は出てこない。そのような学生たちでも、“心ある”医師に育て上げるのがわれわれ教育者の義務である。早速、本論に入ろう。京都大学の学風は、何といてもFreiheit(フライハイト)、自由である。私が入学した1950年ごろは、まだ旧制第三高等学校関係の先生が在職しておられた。全学的にもさすが「弊衣破帽」のパンカラ姿は見られなかった。

最近の学生は、指示があればそつなくこなすが、自分たちから積極的に何かをすることは少ないといわれる。これでは自由な学風の京都大学に入学しても、友や先輩たちと熱く議論をすることもなく、大学では手とり足とりの学習指導が得られないとすれば、戸惑ってしまうのではなからうか。私が入学したころは、このドイツ語のFreiheitは

議論の中で頻繁に聞かれた。freedomより言葉を感じる。本文中でも多用する。いずれにせよ、先輩・同僚たちと酒でも飲んで議論する中で、自ら何かを始めてもらわないと、Freiheitの特徴が出てこない。大勢の先輩・医師にもまれて、自ら何をなすべきかを模索し、始めざるを得ない場が提供されなければなら

ら、後ろからこつそり抜け出し、外科学の受講はそれで終わった。しかし、内科学だけは、当時海賊版で出回っていた原書、『Cecil's Medicine』や『Harrison's Principles of Internal Medicine』を購入し、両者を完読し、サブノートも作った。ハリソンの方が読みやすく、理解しやすいことを覚えている。インターン時代も内科3科には真面目に出席し、Korthの『Klinische Elektrokardiographie』も完読した。また、同級生の深見安君を中心に、Fultonの『Physiology of the Nervous System』の輪読会にも参加した。結局私の学生・インターン時代は、英語・ドイツ語の医学書が読めるようになっただけで、各科の試験の時には、不安いっぱいであつたが、無事卒業できた。結局、臨床科の教授先生のお人柄に接することは全くなかったし、同級生たちとの深い交流もほとんどなかった。

支部だより

大阪支部総会の出席者

緑内障寄与の遺伝子研究 各分野の協力、必要性痛感



る、緑内障に寄与する遺伝子の同定に関する話をしてくださいました。緑内障の治療では早期発見が重要ですが、視野検査や眼底検査に頼っているのが実情で、この遺伝子が同定できればより簡便な血液検査によって患者の早期発見につながるという事です。また、この緑内障に寄与する遺伝子の研究では、眼科や数学科など、さまざまな分野の先生方の協力のもと進められているという話も印象に残りました。講演全体を通じて、基礎研究の成果がいかにして臨床の現場に活かされているのかを垣間みる事ができました。

【大阪】平成24年6月2日(土)、ホテルグランヴィア大阪にて、平成24年度 芝蘭会大阪支部総会が行われました。JR大阪駅の上にある非常に便利の良い会場でした。会の進行は、幹事をつとめられた大阪日赤病院の圓尾隆典先生の司会のもとで進められました。また、議事は大阪日赤病院の網谷良一先生がつとめられました。

総会に続いて京都府立医大分子医科学教室教授の田代啓先生による、「個性を発揮するメカニズムについて—ゲノム学の今日—」と題された学術講演が催されました。田代先生は学生時代から本庶先生の研究室に通われて卒業後もずっと基礎研究の分野で活躍してこられた先生です。また、京大出身の先生としては初めて府立医大の教授になられた先生でもあるそうです。講演では、シグナルシークエンスストラップ法という、サイトカインやホルモンなどの血流中のシグナルタンパクをコードする遺伝子をN末端の分泌配列を利用して同定する手法や、それを用いて同定された遺伝子についてなどの専門的な内容から、個体差は先天的要因である遺伝子と後天的要因である環境のどちらがより寄与するのかについての研究の紹介といった今日のゲノム学の有り様など、幅広い範囲にわたる話をしてくださいました。なかでも、シグナルシークエンスストラップ法を用いて先生が同定されたタンパク質は21種にのぼり、その中でも講演中で紹介されたSDF-1は血液系の幹細胞を正しい位置に誘導する活性を持っており、HIVウイルスの感染阻止能を持つそうです。このためSDF-1をリードに用いたHIVの新薬の開発が期待されており、このタンパクについての情報はHIV患者支援団体のHP等に記載され多くの患者の希望になっているという話が興味深かったです。講演の最後では先生が現在行われている、緑内障に寄与する遺伝子の同定に関する話をしてくださいました。緑内障の治療では早期発見が重要ですが、視野検査や眼底検査に頼っているのが実情で、この遺伝子が同定できればより簡便な血液検査によって患者の早期発見につながるという事です。また、この緑内障に寄与する遺伝子の研究では、眼科や数学科など、さまざまな分野の先生方の協力のもと進められているという話も印象に残りました。講演全体を通じて、基礎研究の成果がいかにして臨床の現場に活かされているのかを垣間みる事ができました。

さまざまな講演、熱く

腫瘍・皮膚・中膜・胸部・悪性外科



あいさつする藤原先生

【阪神】平成24年6月30日(土)、ノボテル甲子園にて、芝蘭会阪神支部総会・阪神臨床医療懇話会が開催されました。総会は支部長である藤原久義先生のあいさつから始まり、阪神支部の現況報告、新しい施設の紹介と順次進んでいきました。

学術講演の後には、京都大学消化器内科学教授の千葉勉先生が、医学部の現状報告をなさいました。大学で現在進行中の医学研究や教育の各プロジェクトの紹介や、新病棟の建設計画や完成予定図の説明などがありました。

教授で大阪赤十字病院名誉院長でいらつしやいます本田孔士先生が乾杯のあいさつをなさいました。会は終始、なごやかな雰囲気であり、会の最後には多くの先生方がわれわれ雑誌部員にも気さくに声をかけてくださいました。そして、宴もたけなわとなり、会は惜しまれながらも開きとなりました。

1は自由に断面を見てとることが可能で、オペレーターとの円滑なコミュニケーションを可能にしてくれるものであるという事です。二つ目は、座長田村淳先生のもと岩間英明先生が「胆管合流異常症に伴う、若年女性の胆嚢癌の一例」という演題で講演されました。内容は、合流異常が胆道癌の危険因子であり、おもに分流手術の方針をとる拡張型の異常に対し、非拡張型の異常の治療方針はいままでに議論が分かれるという事です。

三つ目は座長毎原敏郎先生のもと木幡達先生が「尼崎市における児童・生徒心臓病診療について」という演題で講演されました。内容は、従来の2Dエコーに比べて3Dエコー

総会のあとで講演会が行われ、三つの一般講演と二つの特別講演がされました。一般講演の一つ目は、座長遠藤一男先生のもと前川俊先生が「心臓手術における3D経食道心エコーの有用性」という演題で講演されました。内容は、従来の2Dエコーに比べて3Dエコー

中には多くの先生方がわれわれ雑誌部員にも気さくに声をかけてくださいました。そして、宴もたけなわとなり、会は惜しまれながらも開きとなりました。最後になりましたが、この会を通じて大先輩の貴重なお話をたくさん聞かことができて嬉しかったです。このような貴重な会史

病理診断科の現状を学ぶ

【岐阜】平成24年6月3日(日)、岐阜会館にて、岐阜支部総会が行われました。

まず、京都大学医学研究科基礎病態学講座・病理診断学分野教授である、羽賀博典教授が講演をなさいました。演題は「病理部・病理診断科の現状」です。最初はウィルヒョウにはじまる病理診断学の源流から始まり、藤浪先生に始まる京大病理学の歴史についてお話し

されしました。次に病理診断科の業務内容についてです。病理診断部は現在、20年前に比べて解剖は3分の1に減っているが、組織・細胞診は逆に2倍に増えているそうです。理由として、高齢者が増えたため、がんの診断の需要が増えたこと、免疫染色の方法が増えたこと、がん治療における遺伝子検査の重要性が増したことなどがあげられます。また他科と



岐阜支部総会の出席者

のカンファレンスはかなり増えたようです。現在ス

にお招きくださったことへの感謝の意をもって大阪支部総会の報告を終わらせていただきます。(文責：2回生 大植啓史)

井先生のあいさつで始まり、乾杯の音頭は平尾先生がつとめられました。会には終始和やかな雰囲気であり、先生方はわれわれ学生にもやさしく声をかけてくださり、大先輩方の学生時代のことや、専門を決めたきっかけ、阪神地区の医療の現状など、非常にためになる話を聞かせてくださいました。会が進行すると、若い先生方が一人ずつあいさつをするという事で順番にマイクが回され、われわれ学生もあいさつをさせていただきました。そして宴もたけなわとなり会は惜しまれながらも開きとなりました。

特別講演の一つ目は、座長永井朝子先生のもと長谷川誠紀先生が「こんなにも良くなった！悪性胸膜中皮腫の外科治療成績」という演題で講演されました。内容は、生存率がかなり低い病気である悪性胸膜中皮腫は治療も非常に困難で、胸膜切除術と胸膜肺全摘出(EPP)の二通りの方法があり、今回はおもにEPPについて話されました。EPPでは肺癌と違って麻酔科医が完全に把握することが難しいです。論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

二つ目は、座長藤原久義先生のもと福田和彦先生が「麻酔科診療の現状と問題点」という演題で講演されました。内容は、麻酔科医の数は増加しているにも関わらず、実働麻酔科医が完全に把握することが難しいです。論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

二つ目は、座長藤原久義先生のもと福田和彦先生が「麻酔科診療の現状と問題点」という演題で講演されました。内容は、麻酔科医の数は増加しているにも関わらず、実働麻酔科医が完全に把握することが難しいです。論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

論文は内部のテーマより他科との共同の方が多くあります。最後に鶴山准教授のすめっている、患者の同意書を改訂し、検体を自由に研究に生かす取り組みについてお話しされ、ご講演を締めくくられました。質問としては受託研究のやり方について、受託研究は相手の顔がわかるように病院名を明らかにして特定のとことと取り引きしているのとこととです。次に総会が行われ、その二期生が病理の博士号

支部だより

(文責：5回生 宗宮伸弥)

新代議員決まる

第2回一般社団法人芝蘭会代議員選挙

第2回一般社団法人芝蘭会代議員選挙は、5月7日（月）に開票され新代議員が公示されました。議員の任期は平成24年6月30日（土）に開催された定時総会終了後から2年後に開催される平成26年度の定時総会までとなります。

一般社団法人芝蘭会代議員名簿

氏名	所属支部	氏名	所属支部	氏名	所属支部
安達 秀樹	京都	清水 達夫	大阪	日野原 重明	東京
網谷 良一	大阪	杉山 知行	山口	平田 温彦	秋田
伊藤 暢也	京都	砂川 晶生	奈良	廣瀬 邦彦	滋賀
稲垣 正之	京都	瀬川 嗣郎	大阪	福田 清彦	徳都
今村 清	大阪	清野 裕	大阪	藤原 久義	京都
大城 道也	沖繩	相馬 俊臣	滋賀	二本 隆	東京
大高 道也	東京	高折 晃史	京都	古家 敬三	京都
大田 研治	西播	高三 秀成	岡山	平家 俊男	京都
大歳 雅洋	西播	高橋 晴雄	長崎	邊見 公雄	京都
小川 修	京都	高橋 良輔	京都	本田 孔士	大阪
隠岐 尚吾	大阪	武田 隆男	京都	榊 正幸	茨城
荻野 文章	神戸	武藤 誠	京都	松岡 雅雄	京都
小野 久	東京	竹本 勇	山形	松村 忠史	奈良
折田 雄一	滋賀	辰巳 賢一	東京	松山 榮一	西播
笠木 寛治	香川	田中 守孟	群馬	真鍋 次郎	東京
加藤 静允	京都	筒井 義郎	大阪	馬淵 茂樹	京都
門田 和紀	愛媛	藤堂 秀和	三重	三嶋 理晃	京都
菊池 晴彦	神戸	富本 朝子	阪神	光山 正雄	京都
木之下 正彦	滋賀	永井 博之	阪神	湊 長博	京都
木原 正博	京都	永井 一和	京都	三森 経世	京都
木村 徹	広島	中尾 正久	島根	宮地 良樹	京都
草間 昌三	長野	中川 康夫	大阪	宮本 俊哉	京都
久藤 欣也	京都	中野 俊彦	大分	村井 惟明	高知
小泉 幸裕	大阪	中村 孝志	京都	森 弘文	熊本
河野 孝夫	神戸	中安 顕	京都	矢野 謙二	鹿児島
小柴 郁生	京都	鍋谷 登	大阪	山岡 義生	京都
小西 淳二	福井	成宮 周	京都	山本 剛史	京都
小西 裕	和歌山	新居 正甫	大阪	山本 余語	京都
小坂 義治	京都	西村 太郎	京都	横出 正修	京都
坂口 志文	京都	西村 一男	京都	吉田 耕造	長久
坂口 佳司	京都	野口 雅滋	京都	吉田 長久	純子
佐古 伊康	京都	野口 正清	北海道	吉村 純子	大阪
篠原 隆司	京都	延吉 和夫	滋賀	和田 綿谷	
島原 康行	奈良	林 日合			

事業報告など6議案を承認
芝蘭会総会・評議員会・理事会



議案について議論する評議員や理事ら

平成24年6月30日（土）芝蘭会館別館に於いて芝蘭会総会・評議員会および理事会が開催された。議案は、①平成23年度下期（9月）平成24年3月）事業報告及び収支決算並びに財産目録について、②会長、副会長、常務理事、理事、評議員の選任について、③第2回代議員選挙の結果について、④芝蘭会館別館宿泊施設の運営改善について、⑤医学部歴史資料館（仮称）について、⑥その他についての6件で、議案①については、

医学教育活動等への助成や学生の海外研修等への助成について、活発な議論の上、原案どおり承認された。議案②については、総会にて、理事の湊長博氏、三嶋理晃氏、成宮周氏、再任された同人を会長、副会長、常務理事に再任

人 事 異 動

発令年月日	氏 名	異動内容
H24.5.1	室 繁郎	昇任 内科学呼吸器内科学助教より同講師へ
H24.5.31	平田多佳子	辞任 高次脳科学神経・細胞薬理学特定准教授より滋賀医科大学教授へ
H24.6.1	藤林 俊介	昇任 整形外科科学助教より同講師へ
H24.6.1	豊田健太郎	昇任 内科学糖尿病・栄養内科学助教より探索医療センター探索医療開発部講師へ
H24.6.1	森 潔	採用 内科学内分泌・代謝内科学特定准教授よりメディカルインノベーションセンターTMK 特定准教授へ
H24.6.1	仲川 孝彦	採用 コロラド大学准教授よりメディカルインノベーションセンターTMK 特定准教授へ
H24.6.1	鶴山 竜昭	配置換 法医学准教授より総合解剖センター准教授へ
H24.6.30	根尾 昌志	辞任 整形外科科学准教授より大阪医科大学教授へ

発令年月日	氏 名	異動内容
H24.6.30	伊東 秀文	辞任 内科学神経内科学講師より和歌山県立医科大学教授へ
H24.6.30	小林 雅彦	辞任 整形外科科学講師より京都下賀茂病院副院長へ
H24.6.30	竹村 匡正	辞任 医療情報企画部講師より兵庫県立大学大学院准教授へ
H24.6.30	渡部 則彦	辞任 次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点特定准教授より枚方公済病院消化器内科部長へ
H24.6.30	申 惠媛	辞任 生命科学系キャリアパス形成ユニット（ICDO）特定助教より京都大学薬学研究科教授へ
H24.7.1	小林 拓也	昇任 分子生体統御学分子細胞情報学講師より同准教授へ
H24.7.1	角山 正博	昇任 手術部助教より麻酔科講師へ
H24.7.1	森 章	採用 朝日大学附属村上記念病院准教授より肝胆膵・移植外科講師へ

会 員 訃 報 （敬称略） 謹んでご冥福をお祈りいたします。

多屋 平夫（昭和14年卒） 岡本 道雄（昭和16年3月卒） 松岡 太郎（昭和16年12月卒） 竹森 正義（昭和18年卒） 坊 久雄（昭和18年卒） 羽田 淳（昭和19年卒） 井上 博之（昭和19年卒） 松 学（昭和20年卒） 小泉 淳二（昭和22年卒） 佐藤 博正（昭和23年卒） 須藤 良治（昭和23年卒） 坂本 昌久（昭和24年卒） 横山 巖（昭和24年卒） 請田 安夫（昭和24年卒） 江左 皓一（昭和24年卒） 北田 榮彦（昭和24年卒）	平成23年6月5日 ご逝去 平成24年7月24日 ご逝去 平成24年3月 ご逝去 平成22年11月11日 ご逝去 平成22年12月30日 ご逝去 平成23年5月31日 ご逝去 平成24年3月24日 ご逝去 平成23年6月22日 ご逝去 平成24年3月19日 ご逝去 平成24年1月 ご逝去 平成24年1月21日 ご逝去 平成23年 ご逝去 平成23年11月28日 ご逝去 平成23年12月13日 ご逝去 平成24年6月7日 ご逝去 平成24年5月17日 ご逝去	鈴木 保雄（昭和24年卒） 前田 正明（昭和24年卒） 山田 栄（昭和24年卒） 吉川 恵庸（昭和24年卒） 竹島 滋泰（昭和24年卒） 樺木 勇（昭和26年卒） 加藤 嘉計（昭和26年卒） 今井 昭和（昭和27年卒） 大鹿 不二男（昭和27年卒） 吉川 暉（昭和27年卒） 松岡 昇三（昭和27年卒） 三宅 健夫（昭和27年卒） 山根 邦夫（昭和27年卒） 沼 重良（昭和28年卒） 馬島 治平（昭和32年卒） 志賀 晴子（昭和32年卒）	平成24年6月8日 ご逝去 平成24年6月20日 ご逝去 平成24年4月18日 ご逝去 平成24年4月8日 ご逝去 平成24年3月17日 ご逝去 平成24年3月1日 ご逝去 平成24年4月3日 ご逝去 平成24年2月14日 ご逝去 平成24年5月20日 ご逝去 平成23年3月21日 ご逝去 平成24年6月8日 ご逝去 平成23年12月7日 ご逝去 平成24年7月4日 ご逝去 平成24年1月17日 ご逝去	松田 隆一（昭和32年卒） 林 惣三郎（昭和34年卒） 岡本 俊（昭和35年卒） 甲斐 隆義（昭和36年卒） 高尾 宏美（昭和36年卒） 村沢 洋介（昭和37年卒） 馬場 國彦（昭和39年卒） 清水 慶彦（昭和40年卒） 林寺 忠（昭和42年卒） 山口 英明（昭和45年卒） 田中 正明（教室会員 病理） 田原 和夫（教室会員 内科2） 安田 一（教室会員 整外） 佐々木正道（教室会員 胸部研、病理）	平成23年9月10日 ご逝去 平成24年5月17日 ご逝去 平成24年7月19日 ご逝去 平成24年7月13日 ご逝去 平成24年5月13日 ご逝去 平成23年9月8日 ご逝去 平成24年5月23日 ご逝去 平成24年4月30日 ご逝去 平成24年4月19日 ご逝去 平成24年4月8日 ご逝去 平成22年 ご逝去 平成24年4月2日 ご逝去 平成23年10月25日 ご逝去 平成24年4月20日 ご逝去
--	---	---	--	--	---

芝蘭会報編集委員会
委員長 中尾一和
委員 斎藤信雄、岩田征良、豊國伸哉、山田圭介、園部 誠、阿部恵
顧問 中尾一和
部長 勝島将夫（6回生）
橋本健太郎、中村有輝、山田直生、畑野翔太郎、前田峻宏、宗宮伸弥、柳井谷駿史（以上5回生）
真辺 諄、森山太陽、鶴田将史（以上3回生）
赤埴未宝、宮崎規晶、坂本 慧、大植啓史（以上2回生）
芝蘭会事務局
事務局長 山田 均
総務課長 秋山和美
管理課長 松本 惇

原 稿 募 集
芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場です。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会でご確認ください。
芝蘭会報 編集委員会

●事務局から●
平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。（FAX 075-752-4015）